

Hand in Hand

海を渡る鳥は、波間を漂う流木に憩うという。離婚——それは旅の半ばの一つの出来事。
新たな旅立ちをした女たちはいま手を取り合い、女であるがゆえの偏見と差別に向きあう。
ハンド・イン・ハンドは、生きやすい社会をめざし支えあう女たちの、流木である。

Vol.231 逐次刊行物

18.11.02

国立女性教育会館
女性教育情報センター

〔9歳の女の子が書いた本〕

●「どんなことがあったって、いつも“いいこと”をさがすようにしようよ」「悲しい時は聞くたびに笑っちゃうおもしろいことばを声に出して言ってみて」これらの言葉は、リビー・リースというイギリスに暮らす9歳の女の子が書いた「HAPPYをさがしてあるこう」(メイツ出版/2006年10月刊)にあるものです。両親の離婚を経験し、辛くて悲しいことがたぶん沢山あったのだと思うのに、そんなことは一切書いてなくて、人を元気づける言葉がつまっています。

●大人だけでなく、子どもの自殺も多い時代ですが、誰もがHAPPYを探せたら、そういう余裕が持てたら、多くの人が生きやすくなるのにはと思います。でも、ちっちゃなHAPPYを見つけることって意外なほど難しいんですね。

昔、そう20年も前のこと、2、3歳だった娘が、真剣な顔で私の顔をのぞきこんで、そしてニコツとして「ママ、笑ってごらん」と言ったことがありました。自分では気づかないほど毎日、暗い厳しい顔をしていたことにハッとしたことを覚えています。

●私が翻訳した本に「子どもが書いた離婚の本」があります。原題は“THE KIDS' BOOK OF DIVORCE BY, FOR AND ABOUT KIDS”というもので、アメリカは東部、マサチューセッツ州の小学校の、親の別居、離婚で傷ついた子どもたちが、自分たちを元気づけるために取材して書いたもので、

子どもたちが家庭内の不和でどんなに心を痛めているか、また別居や離婚からなかなか立ち直れないでいるかがよくわかります。1980年代初頭の本で、アメリカでは親の別居や離婚に巻き込まれる子どもたちのための本が心理学者等によってずいぶん出ていましたが、子どもたちは、どの大人の本も自分たちの本当の気持ちを表していないと立ち上がって作ったものだったんです。

●日本では、子どもにまだまだ焦点が当たってなくて、離婚は子どもにとってかわいそうだからと、離婚を阻止する要素としてしか考えられていない時代が続き、子どものケアは手つかずでした。そこで小規模ながら、子どもにとってどういうケアが必要か調査を開始し、子どものための離婚プログラムを編み出したのです。それを本にまとめていた時に、娘が「ママ、笑ってごらん」と。子どものための本を書きながら、暗い顔をしていたなんて情けないですね。でも、その娘の言葉で生き返った思いで、そうだ、私もいつも楽しいことを見つけなくちゃ、こんなかわいい子がいるのに暗い顔していちゃいけない、HAPPYをさがして歩こうと思ったのでした。

子どもの力ってすごいですよね。皆さんも、子どもに助けられた経験をきっと沢山お持ちじゃないでしょうか。

(円より子)

寒い夜よ
あたかお鍋
今日の悲しみよ
湯気と一緒に
消えていって
煮えんる音よ
明日のしあわせが
詰まった
希望の
響きまでよ



●2006 夏合宿報告●

(2006年7月30日/講演)

ペトウ法に学ぶ教育的介護と自立支援

長年、日本の住宅問題に取り組んできた中で、この頃感じているのは「なんでもバリアフリーにするのはほんとうによいことなの？」ということです。狭いバリアフリーの家の中で、ほとんど動かずに閉じこもっていると人間の機能は衰える一方。案をしていたら身体はどんどん悪くなるのはあたりまえで、動けるうちは少々の段差に気をつけながら生活する方が、人間の能力がいつまでも維持できるのではないかと。すぐに車椅子に乗せてしまうのは、一見本人のためのようですが、実は機能を回復するチャンスを奪っているのではないかと感じていました。

これからの高齢化社会では、みんな何かしらの障害を持つようになるでしょう。そのときに寝たきりでケアされるのではなく、介護や医療の現場で、人間の尊厳を大切にする全人的なアプローチで機能や能力を引き出してもらえたら、老後に明るい展望が開けるのではないかと。そういう意味でも、能力を引き出す教育的介護というペトウ法についてのお話を聞けて、たいへん勇気が湧いてきました。



円より子



加藤 みどり (ケアマネジャー・介護福祉士)



●「ペトウ法」との出会い

「ペトウ法」というのは、初めて耳にする方がほとんどだと思います。ハンガリーで生まれた、運動機能障害を持つ人たちの自立を援助する教育学で、ペトウ・アンドラーシュ(1893-1967)という医師が第二次大戦前から構想を温め、戦後、廃墟となったビルの地下室で始めたものです。その内容をお話する前に、私と「ペトウ法」との出会いについて、簡単な自己紹介をさせていただきます。

私はいまケアマネジャーとして働いていますが、もともと福祉や介護畑を歩んできたわけではなく、大学では国際関係学科で学び、フランス語を専攻していました。その学生時代に、いまの私につながる二つのできごとがあったんですね。一つは、春休みに、フランスを中心にヨーロッパを回ったときのことです。英語とフランス語ができれば、ヨーロッパではだいたい用が足りるんですが、ハンガリーに入ったとたん言葉が通じなくなりました。でも人々は真心で接してくれました。今度はぜひ言葉を交わしたいという思いから、帰国後、ハンガリー語を学び始めました。もう一つは、祖父が亡く

なって、お香典返しの代わりに近くの重症心身障害者の施設に寄付をさせて頂いたときのこと。施設長が「中もご覧ください」とおっしゃるので、何の気なしに入ってみたんです。すると、重い障害のある方々がオムツをあてられ床を濡らしたまま寝かされていたり、終日ボーっと過ごしている方が大勢いらして……障害を持って生まれると、こういう生き方しかないのかと、強いショックを受けました。いまから考えると、それは、ただ生命を維持されているだけに過ぎなかったんですが、他に方法はないのかと大きな疑問が私の中に残りました。でも、その時点では将来、福祉や介護に関わるようになるとは思ってもいませんでした。

卒業後、給費留学生としてハンガリーに渡って教育全般を勉強し、ハンガリーに留まって通訳の仕事をするようになりました。ある日、日本人グループが視察に来るというので通訳を頼まれたんですが、その視察先がペトウ研究所。小高い丘をバックに緑に囲まれた白い建物は前を通るたびに気にかかっていた、いったい何の研究所かしらと思っていたのですが、通訳として初めて中に入ってみたら、脳性麻痺の人、脳卒中で片麻痺になった人、パーキンソン病のようにだんだん身体の硬直

が進行していく人、脊髄の損傷で身体に障害が残った人などが、リハビリをしている施設だったんです。

でも、私が見た日本の施設とは違い、声や活気に満ち溢れています。障害者の施設らしからぬ長い階段が正面玄関まで続いていて、当時の私にはバリアに思えたのですが、設計士にわざわざ注文して作ったものだそうで、運動機能障害のある利用者が時間をかけて上り下りしていました。その風景に、ちょっとしたカルチャーショックを受けまして、ペトウ研究所付属の教育機関でペトウ・システムを学ぼうと決意しました。4年制の国立大学で、実践で学ぶ臨床教育が中心です。ハンガリーで結婚していたため、無料で授業を受けることができました。ハンガリーが離婚天国だからというわけではありませんが、後に離婚して子どもを連れて日本に帰ってきましたが、ハンガリーでの最大の収穫は夫なんかじゃありません(笑)、このペトウ法ですよ。その後も文献の翻訳などに携わっていますから、日本で一番、情報を持っているのは私だと自負しています。

今回は時間も短いので、次の3つのポイントに絞ってお話いたしますね。

●自立とは何か

最初に、ペトウ法とは運動機能障害を持つ人たちの

自立を援助する教育学であると説明しました。では、この「自立」とは何でしょうか。

ペトウ法で言う自立とは、年齢相応に、いまいる社会に適應できることを言います。6、7歳になったら小学校へ行けるような身の回りのことが自分でできたり座って話が聞けること、もっと年齢が進めば就労できるとか、家庭内の家事がこなせるとかがこれにあたります。もし私たちが狩猟社会に生きているとしたら狩りができると、農耕民族なら耕作できると、いまの日本社会だったら車を運転できるとか、パソコンが使えるとか、文字が読めるとかが必要なわけです。

運動機能障害があるというのは、運動機能が社会に適應するためにうまく発揮されていない状態を言います。手や足などが十分に機能せず、手が使えないからコップを持ったり着替えたりができない、足が動かないから移動できない、口にマヒがあるから言葉が喋れないなど、生活する上で必要な用が足せないわけです。単純に言えば、この機能できない状態を機能する状態に変えていけばいい。それが自立して生きるということにつながるわけです。

いま日本の介護保険でもさかんに自立支援と言われていますが、ペトウ法から学ぶところは大きいと思います。足りない機能を代行する傾向の強い介護は、潜在

■大椅子で進む■

ペトウ法では車椅子を否定はしないが、少しでも歩ける可能性がある人には、自分の足で移動する方法を教える。そのときに使うのが木製の大椅子。高さ1.1mくらいで、背もたれは板ではなく、円柱状の棧が等間隔に水平に、床まで8本渡してある。

まず、大椅子の棧を両手で握って立つことを教える。親指と他の指とが反対方向から棧を握る。手首の関節が甲側に曲がらなければ、棧から手が外れてしまう。手関節が正しい形をとれば、肘関節も伸びやすく、膝関節も伸びやすくなる。立つという姿勢ひとつをとっても、上肢と下肢は互いの機能を補い合うように協調するのだ。棧を握り、かかとを床につけて、きちんと立てたら、次は大椅子を少し前に押し出すように指示すると、手は身体から大椅子を遠ざけようとするため肘はさらに伸びる。肘を伸ばすことができるようになることは、日常生活動作の幅を広げること大いに役に立つ。

大椅子を押しながらリズミカルに歩く子どもは、たとえば次のように声を出しながら前進している。「押します」「いち、に」「手を叩きます」「押します」「いち、に」「手を叩きます」。こうして少しずつ大椅子を両手で前に押し、一歩ずつ立ち止まって姿勢を整えながら、行きたい場所を目指すのだ。



▲手を引く直接的介護方法では、恐怖心から尻込みする ▲大椅子を押すという目標を与えられると、自分で進む

【参考：『教育的介護のすすめ ―ペトウ法に学ぶ自立支援―』加藤みどり・著、ヘルス・システム研究所・発行(画03-3556-4053)、2,625円(本体価格+税)】



的な能力を潰して、結果として自立のチャンスを奪うように思えます。

●アプローチしだいで人間は変わる

機能はファンクション(function)と言いますから、機能しない・生活の上で用がたせないことはディスファンクション(dysfunction)、用がたせることをオートファンクション(orthofunction)と言います。ペトウ法の場合は、この二つの間にはっきりとした線引きをしません。この人は障害者だから、ディスファンクションの代行をしてあげようという発想ではないわけです。

すべてのディスファンクションはオートファンクションに変わっていくという、非常に大きな方向性を信じてアプローチするから、機能しなかったものが機能するようになって行く。ペトウ法の思想は「変わっていく」というところにあります。

たとえば、手が屈曲しているためにコップも持てない、ズボンも脱げない人が、腕を伸ばすことを学ぶことで、だんだんそれができるようになっていく。用がたせない状態から用がたせる状態に変わるように、教えていくわけです。日本のように最初から寝かせたきりで、この人の障害はこれ以上はよくならないから単に介護するだけとか、片麻痺のリハビリにしても、麻痺した側の機能回復は無理だから残った側を使って生活できるようにという訓練を180日だけで終わってハイさよなら、というわけではありません。オートファンクションの方向へ必ず変わって行くんだというのが、アプローチの底に流れている大きな思想なんです。

私たちのお腹、体脂肪も訓練によってどんどん無くなって行くでしょう？(笑) 変化しないように思える硬い骨だって、歳をとってホルモンが出なくなると壊れる方向に向くし、カルシウムを補うことである程度は丈夫になったり、状況によって変化します。神経系も然りなんです。麻痺した部分も適切な条件の下で動かし方を学習していきます。生命は環境に適應することで存続してきました。ディスファンクションの人々の適應力も例外ではありません。だからこそ教育的な環境を整える意義があるのです。

●教育によって、自分の意志で動き、能動的に生きる力を復活させる

ペトウ法は、正式名称をconductive pedagogyと言います。Pedagogy = 教育。つまり、治療法ではなく教育学です。

身体の機能の教育というのは、外国語の教育と非常によく似ています。たとえばロシア語ができなければ、ロシア語を話す環境下で、私たちは失語症になり、新

しくロシア語の教育を受けなければなりません。そのときに、文法や発音記号が大事になってくるんですね。文法がわかれば文章の組み立てがわかって応用がきくようになるし、発音記号がわかれば辞書さえ引けばすべての単語を発音できて、自分で自分を教えることができるようになる。そういう自己教育ができることが、外国語を習得するには早道なんです。

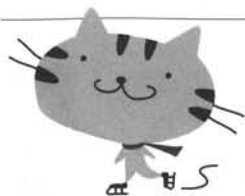
たとえば片麻痺で、腕の関節が曲がり、足が伸びたまま硬直していたら、腕を伸ばす、足を曲げる、というのがひとつの文法になる。それを日常生活で意味のある動作に応用すれば学んだことが定着していきます。この応用動作を日常生活のあらゆる場面で適用する日課を組み立てます。幼児なら遊びの中で、学校の授業でも椅子に座ったら「かかととはちゃんと床についているか」と座位を確認し、「両手を机に乗せて指をしっかりと伸ばして」から字を書く練習をし、わかったら「必ず手を上げて」、発表は「前まで歩いてきて」と、とにかく正しいかたちで動くよう促す。その中で、正しく座る・立つ・歩く・書くなどを学んでいきます。

ここで重要なのは、単に運動動作を教えているわけではなく、「自分の意志を持つこと」を教えているということです。単なる歩行の方便で椅子を押すのではなく、自分は椅子を押す、そのときに肘を伸ばす、自分で左足に体重をかける、右足を前に出す……これら一連の動作すべてを、自分の頭で自分の手足に言語を使って命令して行う。ですから、最終的には介護者とかセラピストがいなくても、学んだ文法から自分で動けるように応用力をつけていくことができる。結局、自分で手足を動かす意志を持つということが、自分の人生をどう生きるかという意志を作ることにつながっていくわけです。

つまり、ペトウ法は、椅子などの単純な道具の扱いを通じて自分の手足の使い方を教え、自分の意志があれば運動機能は自分でコントロールできることを教えて、結果的にはアクティブなパーソナリティを形成していく教育法だということができます。

●日本の介護福祉の今後に向けて

いまの日本の状況は、介護もリハビリ訓練と同様に技術が中心で、こちらから対象者に直接的・物理的に、一方的に働きかける場面が多いのです。また、介護、リハビリ、医療の現場が分断されていて、対象者をパーソナリティをもつひとりの人間として捉えてサポートする視点に欠けています。ペトウ法の思想をもとに、介護と医療が連携する共通の言語を創り、高齢者や障害者がひとりの人間として真の意味で自立できるシステムを創りたい、そのために活動して行きたいと思っています。



「アンケート調査」と「請願署名」に

ご協力ありがとうございました

前号でご協力をお願いした「母子世帯の生活の変化調査」への回答と「児童扶養手当の減額を最小限にすることを求める請願」への署名を送っていただき、ありがとうございました。

アンケート調査については、ハンドの皆様からは117通の回答があり、他の母子家庭当事者団体と合わせて475通の回答がありました。請願署名は、85枚、320名でした。回答いただいた調査票は、現在、藤原千紗（岩手大学助教授）さんら研究チームが集計、分析中です。

その中間結果によると、「母子家庭となった理由」は、「離別」79%、「別居」10%、「非婚」8%、「死別」2%でした。厚生労働省の全国母子世帯等調査では「別居ケース」というカテゴリーでのデータがなく、児童扶養手当や医療費の補助等、福祉サービスが受けられない別居ケースの生活の厳しい実態もこの調査からは得られ、政策提言に活かせるのではと思います。

回答者の年齢は40代が49%、30代が41%と続き、

平均年齢は39.8歳でした。実家に帰らず、母親と子のみで生活している世帯は73%で、1世帯平均1.7人の子どもを持ち、その41%は現在も養育費を受け取っていますが、約半数は養育費の額が減っています。児童扶養手当も74%が受給しています。母子世帯になった当初より所得が上がっているものの、食費や住居費、医療費、そして特に教育費は75%が「増えている」と答えていて、家計支出の増加で、現在の生活の暮らし感が厳しくなっている実態が現れています。

次号に詳しい報告を掲載する予定です。

ご協力いただいた方で希望された方には、謝礼と研究チームからの報告書をお送りいたします。

請願署名は、まだまだ集めています。何万人と集まれば大きな声になります。国会に要請していければと思っていますので、知人、友人等、多くの方々に署名をいただいて下さい。引き続きご協力お願いします。

※署名用紙は、事務局へお問い合わせ下さい。

弁護士一一〇番

収入を隠す夫への 婚姻費用分担の申し立て

Q

夫からの言葉の暴力が原因で、別居して3年。追い出された形で小5の娘をおいて家を出て、今はアパートを借りて一人で暮らしています。パートで働いていますが、うつ気味になり辞めてしまい、いまは収入がありません。

夫は娘が中学3年になるまで離婚しないと言っていました。以前に私が何もいらないから離婚したいと言ったことを覚えていて、お金も親権もやらないで離婚してやるという出し、調停中です。婚姻費用を請求しようと思いましたが、調停委員に「ご主人は収入がないと言っていて、もらえないですよ」と言われてしまいました。夫は自営業で、私も家を出るまで手伝っていたので、実際の収入は大体わかります。どうしたら婚姻費用を請求できるでしょうか。

A

婚姻費用は、婚姻継続中に扶養義務者から権利者に支払われる生活費です。収入のあることが前提になりますが、収入を隠す人の場合は困難な作業を伴います。

婚姻費用を請求するには、まずは、戸籍謄本と、あなたが病気で働けないという診断書・あるいは所得の証明資料を添付して婚姻費用分担の調停を申し立てます。

夫の所得の証明資料がなくても、確定申告書の提出を裁判所が求め、それ



《回答者》
弁護士 竹川幸子

〒06-6393-1111

でも夫が提出しないときには、平均的金額で所得を推計したり、或いは同居中の生活費の額等で推計します。もし同居中から税金の申告が過少で、確定申告の金額より実際に生活費としてもらっていた額の方が高いときには、それを証明すると従前の分担額を基準に計算されることもあります。

ただ、いずれにしろ所得があることを前提にしますので、まじめに働いているけど本当に収入がないなら、支払を求めることは出来ません。自分の勝手に働かないときには、平均的所得があるという前提で計算されますが、外的要因で収入を得られない場合、男だというだけで扶養義務が課せられるわけではないのです。

なお、あなたの方も、働かないのではなく働けないのだと証明しないとパートの平均賃金くらい稼げると認定されますので、診断書は必須です。男女の役割分担に乗った生活は夫婦の仲が良い間は良くても、いちどこじれると職業を持たない側には大変厳しい状況になります。

なお、調停は話し合いですから双方が合意しないとまとまりませんが、不成立の場合は家庭裁判所が事情を調べて審判してくれます。また、具体的な金額は双方の所得・家族構成で異なりますので、資料をそろえて法律相談に行かれた方がいいでしょう。

《家計簿公開》

第160号 宮城県 I・Yさん

[同居の家族]

私 61歳(専業主婦)

夫 68歳(会社経営)

[別居の家族]

義娘 40歳(会社員・夫と小6の娘)

実娘 38歳(会社経営・独身)

実息子 34歳(会社員・独身)

《家計簿内訳・2006年9月分》

★収入★

(なし) 0円

★支出★

食費(外食 含む)	120,000円
交通費(東京往復 含む)	70,000円
医療費	30,000円
交際・娯楽費	30,000円
美容院・被服費	50,000円
雑費	10,000円

合 計 310,000円

(※光熱費、通信費などは、
夫の口座から引き落とし)



◎最初の結婚は16年で破綻

14年前に47歳で再婚し、現在61歳です。前夫とは22歳で結婚して神奈川に住んでいましたが、38歳のときに離婚。経済観念が乏しく、趣味の車やバイクに湯水のようにお金をつぎ込む人で、女性関係もあったようで数日は連絡もなく家を空け、それが耐えられなくなって、当時、中学3年の娘と小学校5年の息子を連れて仙台の実家に帰ったのです。実家では母が年金で細々と1人暮らしており、金銭的余裕はまったくなかったため、すぐにパートでもなんでもよいからと仕事を探しました。それまで働いた経験はありませんでしたが、幸いにも小さな工務店に就職が決まり、お給料は安かったのですが、簡単な経理事務を教えてもらいながら働き始

二度目の結婚に破綻の兆し。 言葉のDV(?)から逃れたい…



めたのです。

離婚後2年たった頃、中学生になった息子が地元の不良グループと付き合い始め、女親の手にはおえなくなったので、前夫に引き取ってもらいました。もともと父親っ子でしたし、前夫もまた実家に戻って祖父母と同居しているため、生活面でも安心してまかせられると思ったからです。前夫は8年前に亡くなり、そのとき私はすでに再婚していましたが、息子はとうに成人して働いておりましたので、心配しておりません。

娘の方はしっかりした子で、高校を卒業後、大手企業の地元支社に就職できました。女3人世帯の収入も安定し、やれやれと思った矢先に母が脳梗塞で倒れましたが、後遺症は軽くてなんとか身の回りのことはできる程度には回復。でも、その頃から軽いボケが始まって、これからどうなるのだろう、と落ち込みがちだった頃に、熱心にプロポーズしてくれる人が現れたのです。

◎望まれて、母も一緒に再婚

以前から好意を寄せてくれているのは感じてはいたのですが、まさかと思っていたのが本音です。勤め先の社長で、私が勤め始めて3年後に奥様と死別し、それから5年を経ての突然の結婚の申し込みでした。毎日のように車で送ってくれ、プレゼント攻勢が続きました。でも、他の社員の手前があるため会社では居心地が悪く、年頃の娘に対しても少々きまり悪く、なにより46歳という更年期の症状も出始めていた自分の年齢に「いまさら結婚なんて」ととまどい、また、介護に必要な母の存在も頭から離れませんでした。

決め手は、母も一緒に面倒を見る、と言ってくれたことでした。久々に女性として見られた嬉しさもありましたし、経済的に楽になるという打算が頭の隅で働いたことも否定できません。彼は私のはっきりとした返事を待たぬまま、母の介護が楽にできるようにと家の改装も始めていました。彼の娘は結婚して家を出ていましたし、私の娘も「自分が独立するきっかけにな

る」と再婚に賛成してくれ、突然の結婚申し込みから1年後、47歳と54歳の新郎新婦となって、72歳の私の母と3人で新生活を始めました。娘は夫との養子縁組はせずに、それを機に近くのアパートで1人暮らしを始めました。

◎経済的余裕を手に入れて…

結婚後は母の介護をしながら、週に数日、会社に通って引き続き経理を担当し、役員という名目で、それまでをはるかに上回るお給料をいただき始めました。高額のお給料には家族の食費が含まれている、というのが夫の考え方。現金で生活費こそ渡されませんでしたが、食費のほかの水道光熱費や新聞代、配達される牛乳代などまで、すべて夫や会社の口座からの引き落としでしたし、母の介護費用は母の年金や貯蓄でまかなえたので、自分や娘のために着物をあつらえたりする余裕もできました。それまで、つましく暮らしてきた反動で、かなり身の回りのことにお金を使うようになりましたが、夫は私が身綺麗にしているぶんには機嫌がよく、母にも優しく接してくれ、まずまず平穏な毎日が続いていました。痴呆が進行する母が時に悩みの種ではありましたが、6年前に他界。時期を同じくして、娘は会社を辞めて上京し、今では長年の夢だったというブティックを廃業し、女社長となりました。

娘は忙しいらしくてほとんど帰郷せず、30歳半ばをとうに過ぎても結婚していないのが心配ですが、母子家庭でも曲がらずに育って立派に自立しており、これ以上何かを望むのは贅沢かもしれない、と娘へのグチは呑み込んでいます。

◎義娘が原因で夫が変わった

そんな生活に3年ほど前から影が差し始めました。義理の娘が子育てが一段落し、夫の会社の社員になったのです。キツイ性格の義娘は社員ともぶつかることが多く、間に立ってしんどい思いをすることが増えました。何よりも問題は夫に、私に関するあることないことを毎日のように吹

母の 気持ち

娘の 気持ち

東京都
Y・Mさん 38歳
(会社経営)

子どものような母に 速く大人になりました。

き込んで、夫がそれを信じたことです。「いい歳をして会社に入出入りする男性に色目を使う」とか「お父さんの財産を湯水のように使っている」という類のこと。だんだん夫の態度も変わってきて、嫌味を言ったり、家の中で暴言を吐いたりすることが増え始めました。

昨年初め、私が60歳になったのをきっかけに半ば強制的に会社を辞めさせられ、経理は義娘が担当することになり、会社の通帳はもちろん、夫名義の通帳もすべて義娘に取り上げられて、家のお金は一切自由にならなくなりました。食費を含んでいると言われていたお給料も貰えなくなったわけですから、夫に月々の食費を要求したところ、「これまで12分に給料を渡してきたのだから貯えがあるだろう。退職金も今後の食費がわりに出したんだ」という答え。食事の支度や家事に少しでも手を抜くと、「何のために家においてやっていると思っているんだ」と罵声が飛びます。精神的に不安定になり、昨年後半から東京の精神科へ通院をしていることをあげつらって「キチガイ」呼ばわりされることも。なるべく顔を合わさないようにして、食事の支度などをした後はすぐに2階へ上がり、1階と2階に住み分けして、ほぼ家庭内別居状態です。

近くに住む姉に相談すると、「言葉のDVではないか」と言い、かといって「自分も息子夫婦と同居の身なので、あなたを引き取れない」と言います。私としては離婚して、実娘と東京で住みたいと思っていて、カウンセリングを受けに上京する際に、将来一緒に暮らすなら住まいを購入する頭金は出してあげると水を向けるのですが、グチを聞いたり、弁護士や病院、カウンセラーを紹介してはくれても、一緒に住もうとは言ってくれません。今後、すぐには経済的には困りませんが、貯金を切り崩している状態で、どうすればよいか、まるで見当がつかない状態です。

速く大人にならざるを得なかった、というのが正直なところ。中3のとき、母に離婚を勧め、荷物をまとめて母の実家に送ったのは私です。私が11、12歳の頃から父は家に寄り付かず、帰ってきたときには母の尋常ではない罵声と泣き声の響く日々が続くのです。このままでは母が壊れるという恐怖感から、父母は別れさせるしかないという決断しました。

父は、母に言わせると女とお金にだらしない人ですが、娘から見ると魅力的な人で、一緒に過ごした時間は楽しい思い出として残っています。離婚後も連絡をとっていましたが女性の影はなく、母は実在しない相手に嫉妬していたのかもしれない。大人になって父から聞いた話では、病的なまでにヒステリックな母の罵声を逃れて、家の近くに駐車した車内で夜を明かすことも多かったとか。再婚はせず、8年前に癌で亡くなったのを弟と病院で看取りました。

母に親としての役割を期待するのはやめようと決心したのは17歳のときです。不登校気味の弟が万引きでつかまったのをきっかけに、母が「こんな子、いらん。Mちゃん(私)が、お父さんのところに連れてって」と離婚届と共に13歳の弟を父のもとへ送り届けさせたのです。弟は「捨てられた」と感じたようで、以来、母には二度と会おうとしません。父に判をもらった離婚届を役所で手続きをしたのも私で、そのときに思春期とは決別し、母の面倒を見る覚悟を決めました。

進学をあきらめて就職したのも、早くお金を稼ごうという一心から。給料はすべて母に渡し、月2万円、ボーナス時に5万円が手渡されるだけで、お洒落も習い事もあきらめていた青春時代でした。ですから私が24歳のとき、母が経済的に恵まれた相手にプロポーズされたときには、もう手を挙げて大賛成。一生、母からは逃れられないと思っていたのが、青天の霹靂のように「母から解放される」ことになったんです。正直言って、自分の人生が始まる喜びでいっぱいになりました。

母の結婚相手とは養子縁組をしませんでしたから、義父ではなく、いわば他人

の関係です。母の再婚後は、一人暮らしを始めてお給料も全部自分のものになり、ある程度の貯金もできた6年前に、母とは物理的にも距離を置こうと会社を辞めて上京。アパレル関係の会社に2年勤めた後、独立してブティックを開き、ごく小規模ですが自社ブランドも開発しています。会社を立ち上げる際、帰省して母の夫に挨拶をしたところ、資金調達に苦労していると話しただけで、「金目当てで久々に顔を出したのか」と言われたことが胸に突き刺さり、以来、こちらからは近寄っていません。母と暮らしてくれているだけでよしと思っています。

母は、ある意味かわいい女性で、いくつになってもフェロモンが出ている感じがする人で、実際に付合っていたかどうかは別として、離婚後もいつも男性が回りにうろろしていました。少しハーフっぽい自分の容姿が母とよく似ていることが嫌で、いまでもわざと男性に嫌われるような言動をとったりしがちです。結婚はしたいと思わず、特に子どもは絶対に欲しくありません。母と同じような仕打ちを我が子にしたら、と思うと怖いのです。弟も似たようなことを言い、独身です。

悩みは、ここ数年、母とその夫との関係が悪くなっていることです。頻繁にグチる電話が入り、また伯母からも母をもてあましてSOSが入るので、時間とお金の節約のために深夜バスで帰省しては話を聞いている。でも、母の話は聞くたびに二転三転し、また伯母と私に話す内容にも食い違いがあって、そこを少しでも追及するとヒステリックに泣き喚くのです。弁護士を紹介しても「Mちゃん、聞いてきて」と私任せ。地元で精神科に通うのは外聞が悪いからと、月に何度かカウンセリングを受けに上京していますが、その度に「帰りたくない」といわれ、背筋が凍ります。伯母も「一緒に住んだらMちゃんが潰される」と言いますが、親は親ですから無視して放り出すわけにも行かず、いまは離婚しないで一日も長く仙台で暮らしてくれることを祈るばかりです。

★離婚した親が「子どもの気持ちを知りたい」という話はよく聞きますが、今回は逆。娘さんから「母は離婚をどう捉えているのか知りたい」とお申し出がありました。お二人から別々にお話を聞くと、一つのできごとでも微妙にズレがあることがわかります。特に娘さ

んは母親から、ある意味、精神的な児童虐待を受けたと感じていらっしやるよう。このような形で互いの気持ちをうかがい知ること、理解や関係性の変化への糸口が見つかると思います。

(円より子)



告知板

★お世話係さんから寄せられた近況報告です。
●近々の会合やイベントのお知らせです。
※申し込みや問い合わせ方法です



事務局便り

2006 ハンド忘年会のお知らせ

恒例の忘年会を行います。普段はなかなか会合に参加できなくて一人で悩んでいる人もいそうですね。食べたり飲んだりしながら、皆でおしゃべりして日頃のストレスを発散しましょう!! いつでも悩みを相談できる仲間やネットワーク作りもできますよ。お楽しみのプレゼント交換も行います。料理の1品持ち込みもお待ちしています。ぜひぜひご参加下さい。

※

- 日 時:12月8日(金)18:30~21:00
- 場 所:千代田区麹町周辺の予定(詳しくは事務局まで)
- 会 費:2,000円(飲食代)
- ※前日までに、事務局まで申し込みを
- ※100円くらいのプレゼントを持参のこと



大阪:

例

大阪ニコニコ離婚講座

原則、午後1時半~午後4時半まで、ドーンセンター(大阪市中央区大手前1-3-49 Ⅷ06-6910-8500)で。参加費は、講座:1500円、ミニ講座:500円

●11月11日(土)テーマ:「年金分割~来春からどうなる妻の年金~」

講師:社会保険労務士 廣瀬ルリ子さん
法改正で、平成19年4月1日施行の年金分割はどうなるのか、手続きや対応など具体的な情報が欲しいというご要望に応える年金講座です

●12月は会場の都合で休講します。

●1月27日(土)テーマ:「女性に関係ある税金の話」

講師:税理士 石田和子さん
財産分与にかかる税は? 夫の扶養を外れたら税金は? etc. 知っておきたい税金の話し、確定申告の前に整理してみましょう
●来年のその後の予定としては、DV支援の話し、法律の話を用意しています

例会

原則、奇数月の第4土曜日の午後、竹川法律事務所(大阪市淀川区西宮原1-4-15-602 Ⅷ06-6393-1331)、またはドーンセンター小会議室にて。変更の可能性があるのでハンド誌でご確認を。

●11月25日(土)午後1時半~午後4時半 竹川法律事務所

●1月27日(土)午後6時~ ドーンセンター小会議室(1&2) 午後の講座修了後、同じドーンセンターで例会を開催の予定です。どちらか一方だけの参加もOKです

★近況★

年金研究会で、来春から施行される年金法改正の勉強をしてきました。平成19年からの年金分割と平成20年からの第3号分割の理念をしっかりと把握しないと勘違いをしてしまいそうです。年金というのは、将来の生活設計における経済基盤の最重要課題であることは確かですが、それだけを捉えて生活設計を立てることはできない状況にあると思います。離婚後の人生を考えるとき、情報、知識、とともに支え合えるネットワークの大切さを痛感する勉強会でした。

愛知: WITH:

電話番号が変わりました!!

Ⅷ

メール

WITHの

●愛知の会は名前を「WITH」と称し、2ヶ月に1度、会合やセミナーを開いています。12月は中旬に、恒例の「忘年会」を予定しています!

※ご希望の方はメール、又は電話でご連絡ください。毎年1回、忘年会だけ参加される方もあります。今年あったできごとをおしゃべりしましょう!

東京:

Ⅷ&Ⅷ

携帯メール

●11月18日(土)18:00~21:00に麹町付近で集まります。

※参加希望の方は11月16日までに上記にご連絡ください。留守電の場合は、名前Ⅷ番号を残して下さい。

★近況★

末っ子の就職が決まり、ようやく親の義務から解放されます。次はちょっと気楽なおばあちゃん役を待っているところです。

各地のお世話係

仙台

埼玉

埼玉

静岡

広島

香川

福岡

福岡

熊本

大分

長崎

ATTENTION

毎号、振込用紙が同封されているので、「振り込んだばかりなのに」「振込みを催促されているの?」というお問い合わせがありました。いいえ、必要なときだけご使用くださいという意味での同封です。ご心配をおかけして申し訳ありません。

★一人で悩まず、気軽にお電話ください★

離婚と母子の110番 Ⅷ03-3261-1835

●基本的に毎土曜日:13~17時 ※11月4日と12月23日、30日はお休み。
※研修を受けた相談員が「無料」で相談を受けています。

面接相談

●原則 第1・第3土曜日:14時~と15時半~

※料金:5,000円/50分(ただし2日前の木曜以降のキャンセルは、キャンセル料2,500円がかかります)

※11月18日、12月は2、16日を予定しています。

※お気軽に事務局(Ⅷ03-3261-1835)までお電話ください。

<購読料について>

購読料は次のいずれか。自己管理のもと、期限切れの際にお振込みください。

①1年間3,600円(送料共) ②2年間まとめて前払いの場合、7,200円を6,000円に。 ③出世払い もしくは免除(どうしても苦しい方は、いつでも遠慮なく申し出てください)

[振込先] 各地の郵便局にて00140-6-120542 ハンド・イン・ハンドの会

ハンドからみなさんへ発信

現代家族問題研究所: <http://www.gendai-kazoku.jp>

円より子ネット: <http://www.madoka-yoriko.jp>

ニコニコ離婚ネット: <http://www.nikoniko-rikon.net>